

学校の特色を生かした総合的な学習の時間の実践・評価とその改善

愛知県立豊橋聾学校

1 はじめに

本校は創立107年の歴史がある東三河唯一の聾学校であり、聴覚に障害のある幼児児童生徒88名が在籍している。幼稚園、小学校、中学校、高等学校に準ずる教育を進めるとともに、一人一人の幼児児童生徒の実態に応じて、社会自立や自己表現の基礎となる能力や態度の育成に努めている。

総合的な学習の時間は、各部それぞれ、子ネット（小学部）、空（中学部）、M S T（高等部）と称し、自ら課題を解決していく力の育成と自己の生き方を学ぶことを目標としている。

本校の特色としては、少人数のよさを生かし、個に対応した活動内容や支援、ティーム・ティーチングによるきめ細かい指導を行っていることが挙げられる。また、内部では部の連携と協力、保護者や同窓生とのかかわり、外部では、地域との交流、国際交流など多様な交流や連携がある。授業では、視覚的な情報提供や、障害認識と自己の生き方を考える内容など、聴覚障害に対応した学習を展開している。

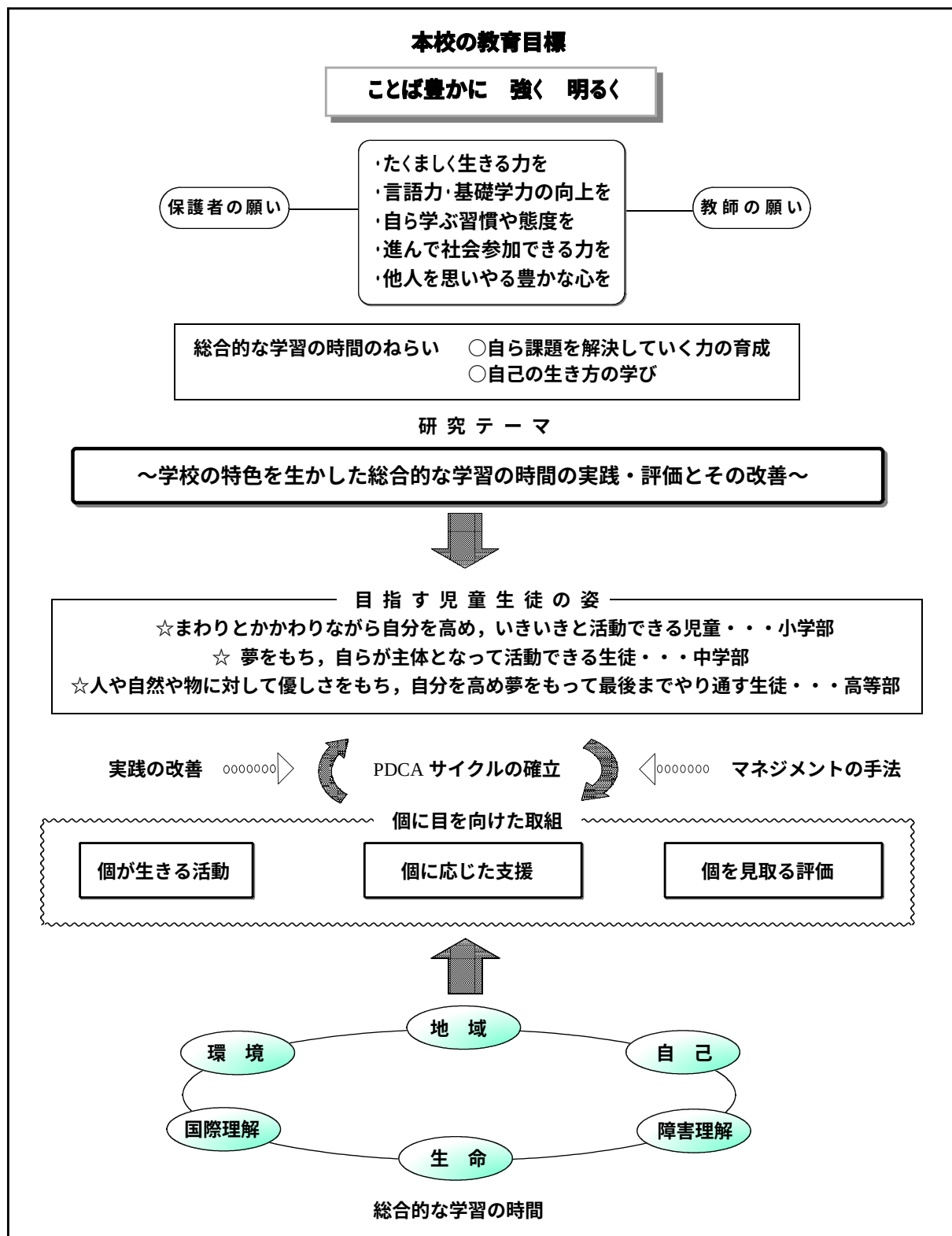
このような中で、児童生徒が自己実現に向けて主体的に学習に取り組むことを目指し、個に目を向けた指導や支援の方法やその評価について実践と研究、更に改善を図った。

2 研究計画

(1) 研究経過

年度	研 究 内 容	
平成 15年度	・研究計画と研究組織づくり ・先行研究より理論、実践情報の収集 ・個が生きる活動内容の検討 ・個に応じた支援の検討 ・個を見取る評価の検討 ・授業実践（研究授業）と評価試行	・研究構想図の作成 ・内容系列表の作成 ・評価の5観点表の作成 ・評価表の作成
16年度	・授業実践と評価システムの改善 （P D C Aサイクルの確立） ・抽出児童生徒の変容と考察 ・外部評価の検討	・評価表の改善 （個別の評価表・学習履歴図・活動の記録）
17年度	・マネジメントの考えを取り入れた授業 実践と評価の改善 ・研究のまとめ	・研究紀要作成

(2) 研究構想



3 研究内容

(1) 個が生きる活動

ア 小中高を見通した内容系列

小学部3年生から高等部3年生までの10年間の活動内容が系統的になるように、小学部中学年、小学部高学年、中学部、高等部の段階ごとに①目標、②目指す子供の姿、目指す生徒像、③内容の3点

を明確にし、「豊橋聾学校 総合的な学習の時間 内容系列表」(資料1)としてまとめた。

～内容系列表の作成に当たって～

①目標：自ら課題を解決していく力の育成、自己の生き方の学びの2点から、各段階の目標を定めた。

②目指す姿、像：後に示す「5観点」からとらえ、各段階にて示した。

③内容：「環境」「地域」「生命」「自己」「国際理解」「障害理解」の6つの領域を設定した。

「障害理解」は、「障害認識」と「福祉」の分野を合わせ、障害者としての自身からはじまり、広く福祉社会へ目を向けていく領域とした。

この内容系列表を活用して、児童生徒の実態、学校や地域の特色を生かしながら単元を設定した。6つの領域を取り扱う軽重は各部ごとに違いがあるものの、連続性や継続性がある取組ができるように、全校で共通理解を図った。

イ 個の夢をはぐくみ、自己の生き方を考える活動内容

小学部3、4年生(平成15年度)は「交通量の多い聾学校前の横断歩道に信号機を付けて欲しい」という願いをもち続け、地域に呼び掛けながら調査活動をしてきた。地元の自治会役員や小学校、警察署や市役所などの協力も得て、念願の信号機が付くことになった。児童の思いが周囲を動かし、社会を変える契機となったと言えよう。また、地域でアンケートを取ったり「信号だより」を配布したりする活動の中で、これまで発音の不明りょうさから人とのコミュニケーションに自信がもてなかった児童が、“どうしたら自分の思いを伝えることができるか”という課題に正面から取り組み、障害のある自分の生き方を少しずつ考えることもできた。

一方、高等部では、毎年2学期に各国の留学生を本校に招き、留学生に楽しんでもらえるような、趣向を凝らした交流会を開いている。給食や清掃活動をする頃には、すっかり仲良くなり、アドレス交換をする姿も見られる。お互いに近付きたい、コミュニケーションをとりたい、この学校に来てよかったと言ってもらいたいという思いが、すばらしい会の実現につながったのだと思う。

ウ 豊かな体験を軸にした追究学習

小学部5、6年生(平成15年度)は、「地球を守れ」の単元で、緑の募金活動やリサイクル活動などを体験し、調べたことを検証したり、新たな課題の発見に結び付けたりして、体験を継続的な活動の原動力としてきた。

また、小学部3、4年生(平成16年度)も、給食の魚の消費ルーツを探るために、魚店や魚市場などの見学をしたり、水産高校での加工品作りに挑戦した。こうした中で、子供らしい視点やこだわりを自らの課題として設定し、息の長い追究学習を展開している。このように実際の体験からより自分に引き寄せて、子供たちが「分かった」という実感をもてるように支援するとともに、体験から感じたこと、考えたことを基にして学習課題を設定できるようにしている。

(2) 個に応じた支援

ア 個が活躍できる場

中学部は、毎年10月に行われる豊橋祭りでバザーとゲームコーナーを企画運営している。手順や方法を話し合い、それぞれが係をもって協力し合って進める。この企画のリーダーを買って出たのは、本校に入学して3年目の生徒Aだった。生徒Aは、興味のないことには振り向きもしない、自由奔放な性格の生徒だった。みんなをまとめきれず、活動が遅々として進まなかったり、他の生徒から非難を受けたこともあったが、教師の支援と友達の協力でやり遂げることができた。生徒Aが活躍できる場を保障し、周囲が生徒Aをリーダーとして認め、育ててきた結果であろう。

愛知県立豊橋聾学校 総合的な学習の時間 内容系列表

資料1

小学部		小学部中学年	小学部高学年	中学部	高等部	中・高等部	
目 標		いろいろなものごとを自分にひきよせ、生活を豊かにする力の育成	自分の思いを大切に、社会に働きかけていく力の育成	夢を育て、自己実現していく力の育成	自己を生かし、主体的に社会を生きぬく力の育成	目 標	
目指す子どもの姿	興味・関心	自分たちを取り巻く身近な自然、環境に興味や関心を持ち、それを好きになって積極的に活動できる。	地域や身近な自然、社会、文化に興味や関心を持ち、そこから自分たちの課題を設定し、自分たちなりに進んで追究できる。	自然、社会、環境などに興味や関心を持ち、自主的に課題を設定し、意欲的に追究しようといふことができる。	自然、環境、社会などに関心を持ち、様々なものに積極的に参加し、物事に創造的に取り組むことができる。	関心意欲態度	目指す生徒像
	かかわり・よさ	分かりやすい方法で、友達や周りの人に積極的に関わり、互いに協力し、友達のよさを見つけながら追究活動を進めることができる。	友達や地域の人たちとともに、お互いのよさを認めながら、自分の生活、地域をよりよくするために協力し、様々な活動に取り組むことができる。	適切なコミュニケーション手段を用いて、また相手の立場や考えを考慮し、尊重しながら理解したり、自己の考えを発言したりすることができる。	言語力を高め、適切なコミュニケーション手段を選択使用でき、自分や相手の文化的背景を理解することができる。	コミュニケーション	
	課題追究	課題を解決するために必要な情報を自分なりの方法で収集したり、自分で追究計画を立てたりして、見通しをもって活動できる。	課題を解決するために必要な情報を効率よく収集し、効果的な方法を考えたり、活動の計画を立てたりしながら見通しをもって学習できる。	自ら課題を設定し、課題解決に応じた学習計画を立て、多様な方法で情報を収集し、取捨選択して、課題を解決していくことができる。	自ら課題を設定し、解決のために必要な情報を入手し、解決の方法を論理的に思考して課題を解決することができる。	課題設定及び解決の能力	
	表現	いろいろな表現方法を知り、それを用いて自分の思いを人に伝えることができる。	様々な方法を駆使して、自分の思いを表現し、外部に発信できる。	学習したことや自分の考えを効率よくまとめ、様々な方法を用いて、効果的に表現することができる。	自己理解を深め、自分の考えを適切に主張でき、自分らしく表現することができる。	表現	
	応用	学習全般を振り返り、そこから得た知識や経験を、自分の生活に役立てることができる。	学習全般を振り返り、様々な方向から総合的に理解し、そこから得たことを、自分の生活に役立てることができる。	自己を客観的に評価し、よりよい自己実現に向けて努力することができる。	情報を有効に活用し、知識や経験をもとに総合的に思考判断し、その成果を自身の生き方に反映できる。	応用	
内 容	環 境	環境問題と自分たちの生活に関係があることを知り、自分たちができる方法で環境保全に取り組む。	環境と自分たちの生活とのかかわりについて理解を深め、環境の保全に積極的に取り組み、自分を取り巻く環境を日常的に大切に作る。	身近な自然現象を見直し、自然や環境との関係について考える。環境に配慮した生活スタイルを理解し、家庭や地域で実践しようとする。	自身を取り巻く世界への関心を高め、環境問題についても自分の考えを持ち、積極的に取り組む。	環 境	内 容
	地 域	学校の周りの生活や文化に親しみ、自分たちの地域に愛着を持ち、進んで地域の人とかかわる。	地域の伝統、文化を理解したり、地域を支える人々の活動や願いを知ったりする中で、問題点を知り、地域の人と協力して行動する。	地域の諸問題について深く理解しようとする。また、地域社会の一員としての自覚を持ち、地域社会に関与し、連携を深め、その発展と向上に貢献しようとする。	一般的な社会の仕組みや産業全般に対する理解を深め、自らの進路選択に生かす。	地 域	
	生 命	すべてのものに命があることを知り、命の尊さに気付く、大切にするとともに、安全で健康な生活を送ろうとする。	生命の尊さを知り、すべての生命を慈しむ心を持ち、自分の生活を見直して、よりよい生活を送る。	他者を思いやる心情と共に生きる社会の一員としての自覚を高めようとする。また、生命の尊さを理解し、健全な生活を送ろうとする。	生命への畏敬の念を育み、尊敬する態度を身に付ける。	生 命	
	自 己	様々な芸術作品や、身近な人の働く姿に触れることで、いろいろなものに興味・関心をもつ。	自分の興味・関心のある芸術的、文化的な活動や労働などの体験を通して、楽しさを味わい、興味・関心の幅を広げる。	心豊かに潤いのある生活をしようとする態度を身に付け、また自分の適性を知り、生き方を探ろうとする。	自己の特性を知り、社会の一員としての自身の生き方について真剣に考える。	自 己	
	国際理解	日本や外国の文化に触れ、日本に愛着を持ち、外国への興味をふくらませ、文化、言語に親しむ。	日本や世界の文化の理解を深めるとともに、それぞれのよさを尊重する。	他の国の文化や歴史への関心を高めたり、理解を深めたりしながら、伝統を尊重しようとする意欲をもつ。また、外国人との交流を通して、コミュニケーションを積極的に図ろうとする。	外国人との交流や外国の文化に触れ、国際理解を深めると同時に、自国の文化への理解を深め、国際社会の一員として共に生きていこうとすることができる。	国際理解	
	障害理解	自分の障害について知り、社会の中で生きていくために、自分たちができることを考える。	自分の障害やその他の障害について理解し、思いやりの気持ちをもつとともに、よりよい生活を送ろうとする。	自己の障害について正しく認識し、克服していこうとする気持ちを高めながら、社会の一員としての自覚をもつ。また他の障害にも目を向け、助け合おうとする。	障害者としての自身を知ることから発して、障害全般へ、そして、福祉へと理解の幅を広げる。	障害理解	

イ 障害に応じた支援

聴覚に障害のある児童生徒には、視覚的な情報が効果的であると言われている。本校でも、写真やビデオ、実物を見たり触ったりして学習する場を多く取り入れた。調べ学習や発表などには、パソコンを活用し、視覚的な情報収集と情報発信にも努めた。

また、少人数のよさを生かして、個々の目標を立て、個々の児童生徒を生かす支援も心掛けた。ティーム・ティーチングによるきめ細やかな支援の中で、児童生徒との対話や記録物などを通してのやりとりを大切に、その中から一人一人の思いを引き出し、把握していった。

(3) 個を見取り、個を把握する評価

ア 評価の5観点とその下位項目の設定

○ 小学部の評価の5観点

①興味・関心 ②かかわり・よさ ③課題追究 ④表現 ⑤応用

○ 中、高等部の評価の5観点

①関心・意欲・態度 ②コミュニケーション ③課題設定及び解決の能力 ④表現力 ⑤応用力

本校では、聴覚障害ゆえに大きな課題となっている人やもの、こととのかかわりの中でよりよいコミュニケーションの在り方を学び、かかわるもののよさを見付ける力を育成していきたいと考え、本来「表現」に含まれる「かかわり・よさ」や「コミュニケーション」を一つの観点として設定した。

さらに、各部ごとに観点の下位項目を設定し、具体的な姿を評価のよりどころとし、偏りない客観的な評価ができるようにした。(表1・表2・表3)

ティーム・ティーチングの利点を生かし、複数の指導者の眼で幅広くいろいろな側面から評価するよう心掛けた。児童生徒の取り組む姿、記録物、児童生徒との対話、そして生活全般の中からも変化を見取り、個別に評価表にした。

継続的な評価は、児童生徒を評価するばかりではなく、指導者の目標設定や授業の構成、進め方、支援の仕方などを振り返る機会にもなった。この5観点は、目指す子供像、生徒像であるため、目標はこの5観点に基づいて設定することとし、明確な指導が展開できるようになるとともに、指導と評価の一体化を図ることができるようになってきた。

イ 評価資料

	小学部	中学部	高等部
指導者	・ 個別の評価表	・ 個別の評価表	・ 個別の評価表
自 己	・ ワークシート ・ ワクワクマップ	・ 活動の記録 ・ 学習履歴図	・ MST 活動参加報告 ・ MST 報告評価表
外 部	・ がんばったねカード (保護者)	・ アンケート (参加者)	・ 講師からのコメント

4 具体的な実践

(1) 幼稚部や中、高等部の身近な人材に触れ自分の生き方を考えていく取組 <自己・障害認識> ～「私の現在、過去、未来」 小学部5年生B児に寄り添って～

ア 小学部の子ネットの取組概要

子ネットとは『子供 New Education in Toyohashi』の頭文字を取ったものである。子供たちが主体となって、知識や技能、情報や体験など様々なネットを張り巡らせて試行錯誤しながら活動できるようにとの願いが込められている。学習グループは学年、あるいは隣接学年で編成し、子供同士がかかわり合えるようにするとともに、教師もチームを組んで指導に当たれるようにした。

この単元は、小学部5年生の取組で、幼稚部から高等部まで一貫教育をしている本校の利点を生かし、聴覚に障害のある自分の成長を振り返り、これからの生き方について考えるものである。幼稚部の幼児や中学部、高等部の生徒など校内の身近な人材、保護者、卒業生や社会で活躍する聴覚障害者など、多くの人たちとかかわりながら学習を展開できると考えた。

イ 小学部の評価の5観点（表1）

観 点	項 目	具 体 的 な 姿
興味・関心	興味・期待をもつ	対象に関心をもち、それに関するものを探したりする
	ハテナ？を作る	調べてみたいこと、知りたいことをたくさんあげる
	知る喜びを味わう	気が付かなかった事柄を知って、興味の幅を広げる
かかわり・よさ	相手に合わせたコミュニケーションを選択する	相手に合わせたコミュニケーション手段を選択し、使う
	積極的にのかかわる	相手に伝わらないと分かった時、別の手段を考える
	友達と協力する	思いを伝えるために、人・もの・事柄に積極的にのかかわっていく
	人と話し合う	自分にできること、友達にできることを考え、分担する
	他者を認める	友達が困っている時に手助けできる
		意見を聞き、比較、議論する中で、自分の考えを再考する
課題追究	課題を設定する	異なる意見や行動を見聞き、それを認め、よいところは受け入れる
	計画を立てる	先生や友達のアドバイスをよく聞く
	情報機器を使う	生活や体験の中から、調べるに値する課題を探し出す
	調べ方を考える	課題を解決するために、何をどうすればいいか自分で見通しをもつ
	試行錯誤する	FAX, コンピュータ, デジカメ, ビデオなどの情報機器の使い方を知り、必要なものを使って調べる
	判断する	情報機器, インターネット, 本, 観察などいろいろな方法で、必要な情報を得る
	実行する	いろいろな方法を検討し、よりよい方法や解決策を考える
	結論を導く	情報や友達の意見を参考にし、自分の意思を決定する
表 現	情報を整理する	多少の困難にくじけず、粘り強く取り組む
	まとめ方を選択する	情報や意見を総合して、課題を解決する
	まとめる	集めた情報を分類したり、必要なものだけを取り出す
	表現する	ポスターセッション, 壁新聞, パソコン, パンフレット, たよりなど、様々なまとめ方を知り、まとめる方法を選択する
応 用	発表する	調べたことや考えたことを足跡が見えるように、ノートやファイルにまとめる
	次に生かす	調べたことや考えたことを相手に伝えるように、表現する
	役立てる	聞き手に合わせた言葉遣い, コミュニケーション, 態度で自分の思いを発表する
	成長を振り返る	学んだことを人のために生かす
関連させる	自分の学習を振り返る	自分の学習を振り返り、自分に付いた力、これから付けたい力を考える
	関連させる	日常と学習を結び付け、新たな学習課題への意欲を高める

ウ 5観点に基づく児童Bの実態と単元の目標

観 点	興味・関心	かかわり・よさ	課題追究	表 現	応 用
実 態	身の回りのことから、中学部、高等部の先輩や卒業生の活躍などに目を向けるようになってきた。	人見知りをするところがあり、かかわっていくまでに時間がかかる。リーダー性を発揮してみんなをまとめながら取り組める。	調べ方はいろいろな方法を考えたり提案できる。手順を示せば、段取りよく活動できる。昨年からインタビューの仕方を学んでいる。	手話、キュー・サイン、音声を用いている。視覚的に分かりやすく表現しようという意識が少し低い。	学習したことや考えたことなどを日記や作文に書いたり、教師や友達と話題にしたりして、学習を振り返っている。
単元の目標	自分の育ってきた様子や将来の姿に思いを巡らせ、自分の生き方について追究しようとする意欲をもつ。	先生や家族の話、友達や先輩の意見、授業参観や交流を通して、自分にかかわる多くのもの、こと、人の存在に気付き積極的にかかわる。	課題を追究するためには何をすればよいのか、誰にどのようなことを聞けばよいのかなど、計画を立てて学習を進めていくことができる。	相手や場所に応じた適切な表現方法を考え、自分たちが調べたことを積極的にみんなに伝えることができる。	今まで自分を支えてくれた人達に感謝をするとともに、自分の将来像を思い描き、これから自分がなすべきことに目を向けていくことができる。

エ 授業展開

ステージ1では、5歳の頃のことを調べ、今までの自分を振り返った。自分の写真を見たり家族から話を聞いたり、幼稚部時代の担任に話を聞いたりした。幼稚部へ参観に行った時、園児に付き添う保護者に関心をもった。家族や周りの支えがあってここまで成長できたことに気付かせる機会であると考え、付き添いについて調べることにした。

【付き添いのことを調べてみよう】

B C D Eは児童

C 母が病気の時は、父が会社を休んで付き添ってくれた。

C お兄ちゃんは、家ですっと独りぼっちだった。かわいそうだった。

B 学校が遠いから、朝早く起きて家事をやった。大変だったみたい。
母が付き添いの間は家事を祖父にお願いしたんだって。

D 母親が付き添いのため、また、自分に言葉を教えるために花屋さんの仕事を辞めたことは、残念だけれどうれしい。



B C D E いろいろな人にお世話になっているね。

C D 家族の協力や母の努力がなかったら、今何も分からないままだったと思う。

自宅から遠い聾学校へ我が子が通学するのに、家族が送迎し、言葉の獲得に向けて、家族も学校で勉強をするために付き添っていたという事実で改めて気付いた。そして、そのために家族が苦労したこと、協力し合ったことなどを知り、家族の自分への愛情を感じ取った。今の自分がここまで成長したのは、家族の愛があったことに、感謝の気持ちをもつことができた。

B 今の自分がいろいろ分かるのは、母がキュー・サインを覚え、いろいろなことを教えてくれたから。

B C D E 今までの先輩たちも、こうやっていろいろ覚えてきたんだね。



【今の自分は・・・】

B D 難しい勉強もできるようになってきた。
体も大きくなったよ。

E まだ、お母さんにいろいろやってもらうことが多いな。

C まだ友達とけんかをしたり、わがままを言うてしまうこともあるよ。

学習活動【付き添いのことを調べてみよう】の児童Bの目標と評価

観 点	興味・関心	かかわり・よさ	課題追究	表 現	応 用
目 標	幼稚部の母親の付き添いの様子を見て、自分の家族が付き添ってくれたころのことや苦労したこと、うれしかったことを知りたいと思う。	付き添いの話題から家族と触れ合い、今までの自分と家族のかかわりに気付く。友達の発表や話し合いからそれぞれの家族の愛情に気付く。	聞きたいことを項目立て、プリントにまとめる。自分をどのように育ててもらったかということを知り、家族の愛情の深さに気付く。	調べてきたことを、音声为主体にして、手話、キュー・サインなどを使って、積極的にみんなに伝える。	家族の協力について知り、自分が支えられてきたことに気付く、感謝の気持ちをもつ。
評 価	母親が自分のためにキュー・サインを覚えてくれたという母親との会話を機に母親の思いに触れ、家族の苦労に関心をもって課題追究につながった。	母親と写真を見ながら幼少のころの話をしたと話していた。友達の母親の苦労話に「へえ、大変だったね」と感嘆の声を揚げたり、共感しながら聞いていた。	家事のやりくりや病気の時の対応、学校での過ごし方などの項目を立て、まとめた。授業の中で友達の話も聞き、家族の大変さや愛情に気付くようになった。	前を向いて、はっきりした発音、手話とキュー・サインを使って発表できた。「家族のおかげです」というところは特に声が大きかった。	今までの自分の成長は、家族や親戚に支えられてきたということが作文に書かれていた。亡くなった祖父の協力についても触れていた。

ステージ2では、将来に目を向ける活動を展開した。中学部や高等部を見学したり、先輩たちから学校生活の様子や進路について話を聞くことができた。その後のB児の日記には、将来に向けた思いがつつられていた。

中学部と高等部の授業を見に行き気が付いたことがありました。それは、クラスが同じでも勉強の内容がそれぞれ別だったこと。授業が難しくて分からないことがたくさんあったこと・・・中略・・・。

分からないことはこれから調べて分かっていけばよいと思います。そうすれば未来が分かってきて、楽しくなったり、わくわくするかもしれません！夢はあきらめずに前に進み出そう！もう一度やり直せばできるはずだと私は信じています。

5年生の実践は、次年度、卒業生や社会で活躍している聾者（聴覚障害者）から、苦労や可能性について話を聞いたり、夢について語り合ったり、アドバイスをもらったりする活動へと続くことになった。将来に向け、自分の夢をどのように育てていったらよいのかを考える単元となった。

(2) マネジメントサイクルによる中学部「豊橋祭りに参加しよう」の改善 <地域・自己>

～ KJ法と課題解決シートの活用 ～

ア 中学部の空（くう）の取組概要

総合的な学習の時間「空」では、中学部全体で、新入生歓迎会、国際交流、野外活動、文化祭などの行事と関連させながら、生徒の自主性を重んじ、思いやりの心の育成、自己表現力の向上、視野の拡大などを目指している。教師の願いは、成長する可能性をもった生徒たちが、様々な経験や知恵を吸収し、やがて夢をかなえていくことである。この吸収前の生徒の心と体の状態を空（くう）と例えた。また、空（くう）とは、もの・ことの在り方を考えるという教えもあり、学習の取り組み方にも通ずるものがある。

中学部では、毎年生徒自らが活動に主体的にかかわり、視野を広げながら地域や社会に貢献することを目的として豊橋祭り（注1）に参加している。生徒たちが主体となってゲームコーナーを企画運営したり、バザーの手伝いをしたりしている。ここでの収益金は、ユニセフを通してアフリカ難民や地震の被災地などに寄付をしている。

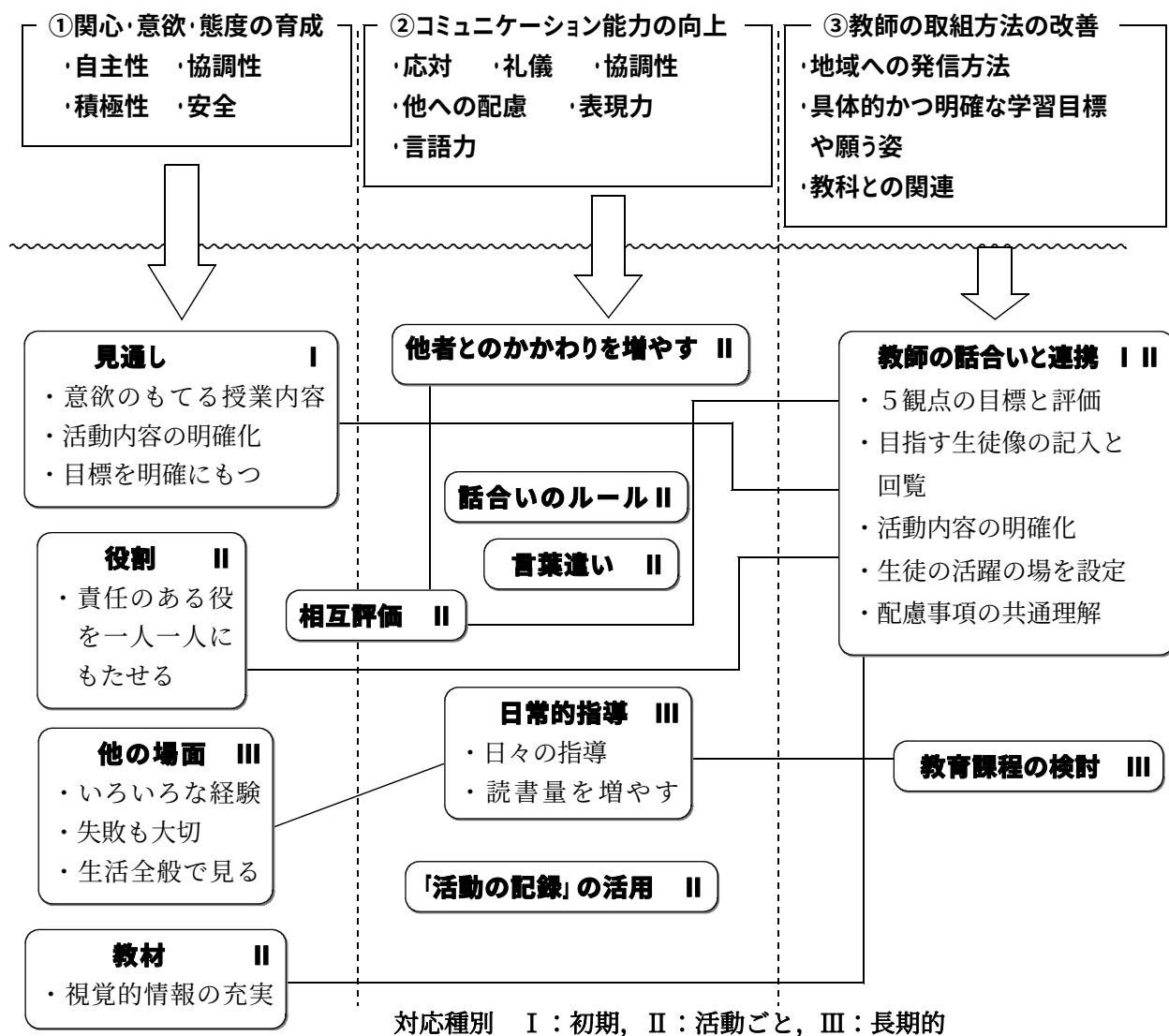
（注1） 1954年より毎年10月第3土・日曜日に豊橋市内を中心として開催される東三河地区最大のイベントである。カーニバル大行進、市民総踊り、子供造形パラダイス、バザーなど市民参加型の多彩な行事が行われている。

活動においては、3年生のリーダーと2年生のサブリーダーを立て、縦割り班を編成して進めている。生徒たちは活動ごとに反省会をもち、自己や友達を評価する力を身に付けてきた。また、評価表や活動の記録なども有効に活用され、中学部の教師全員の目で生徒の活動の様子や変化を分析するなどティーム・ティーチングの効果も現れている。このような成果を生かし、計画（PLAN）→実践（DO）→評価（CHECK）→改善（ACTION）のマネジメントサイクルを活用しながら、単元「豊橋祭りに参加しよう」の取組をさらに改善し、単元の目標に迫った。

イ 「KJ法」と「課題解決シート」活用による「豊橋祭りに参加しよう」の改善

これまでの実践からKJ法（注2）にて課題を整理すると、①生徒の関心・意欲・態度の育成、②生徒のコミュニケーション能力の向上、③教師の取組方法の改善の3点に集約された。さらに各課題について、同じくKJ法で解決策を探り検討した。（図1）

（注2） 文化人類学者川喜田二郎氏が考案した創造性開発（または創造的問題解決）の技法で、川喜田氏の頭文字をとって“KJ法”と名付けられている。ブレン・ストーミングなどで出されたアイデアや意見などを一枚ずつ小さなカードに書き込み、それらのカードをグループ化していき、それらを小グループから中グループ、グループへと組み立てて図解していく。こうした作業の中から、テーマの解決に役立つヒントやひらめきを生み出していこうとするもの。



（図1） KJ法による課題解決のルート

これらの解決策をさらに詳しく掘り下げ、具体的に実施していく時期によって、Ⅰ：初期、Ⅱ：活動ごと、Ⅲ：長期的な展望の3つに分類した。そして、それぞれに課題解決シート(資料2)を作成し、部内の教師に案を記入してもらった。協議の前にまとめておき、話し合いが効率よくできるようにした。さらに、協議で決定したことを明記して再び配布し、実施後に結果や考察、感想などを記入してもらい、成果や課題などを評価した。

(資料2) 中学部総合的な学習の時間 指導と支援の課題解決シート

単 元		豊橋祭り(中1～3年)	実施期間 7月～10月
課 題	Ⅱ 各活動において配慮、共通理解すること ①役割を分担し責任をもたせる ②他者とのかかわりを増やす ③話し合いのルール、言葉遣いを身に付ける ④相互評価を行う ⑤視覚的な教材を活用する ⑥「書く」「表現する」機会を増やす		
具 体 的 な 対 策	①役割を分担し責任をもたせる ・内容や方法を明確に提示(例を示す) ・全体の中の立場を自覚させる(リーダーの自覚) ・手を出しすぎない(失敗から学ぶ) ・自己評価、相互評価(どうだったか、どうすればよいかなど次へつながる評価) ・自主的な係選び(～がやりたい、自己選択) ②他者とのかかわりを増やす ・グループ活動における配慮 ＊協力、連絡、伝達 ＊役割設定 ・外部とのかかわり ＊校内の幼児児童生徒、教師 ＊地域へ宣伝(保育園、小学校、校区館、スーパー) ③話し合いのルール、言葉遣いを身に付ける ・身に付けさせたいルール 人の発言をよく聞く、見る 相手に伝わるように話す 分かったか、分からないかの確認 ～だから～です 一人一回発言 ・方法 日々の指導 ルール表作成 → F案提出29日 自分たちでルールを決める ④相互評価 → G案 ○次回につながる評価 ・よい点、もっと～した方がいい点 ・一体感を感じ取り、意欲をもつように ・評価を公表する ・人にほめられるように活動する ⑤視覚的な教材 → H案 ・絵カード、写真、映像の活用 ・授業で、ホワイトボードを活用 ⑥「書く」「表現する」機会を増やす。 ・「活動の記録」の活用 ・評価表の活用(前向きな評価) → I案 ・作文 → J案 ○人任せではなく、自分から積極的に活動できるようになった。 ○視覚的に例を提示するとよく理解でき、活発に活動できた。 □見守っていると、生徒の変化や成長が分かる。先回は人任せだった生徒が次回は積極的にやっているとうれしい。 □自己選択は自己責任となり、責任をもって最後までやり遂げる。 ○活動を進めていくと問題にぶつかり、その時話し合いが行われていた。 ○模擬店では、幼児や児童に対してキュー・サインを使って話していた。 □当日は、お客さんにどのように伝えるか、どういう言葉遣いをすればいいの自分たちなりに考えていた。 □地域への宣伝は、地域とのかかわりを深め、障害理解にもなるのでよかった。 ○リーダーを中心に「話し合いのルール」をまとめて提案できた。 ○生徒同士の話し合いの時「分かったか分からなかったか」と確認できるようになった。 ○教師がルールを提示してしまうのではなく生徒が気づき、決めるようにさせたい。 ○生徒の 変 容 ○友達 の よ い と こ ろ を た く さ ん 見 付 け ら れ る よ う に な っ て き た。 ○友達 の 評 価 を 楽 し み に し て い る 生 徒 が い た。 励 み に な る。 □自分 の 作 業 も 頑 張 り つ つ、 友 達 の 頑 張 り に も 目 を 向 け る こ と が で き た。 □公表 す る 時 間 が と れ な か っ た。 □プレゼンテーションソフトを使用した説明は、分かりやすく生徒が興味をもって見る。 ○ある生徒が「書くことが楽しくなってきた」と言っていた。 □生徒の思いがとらえやすい。		

※ F G H I Jは教師名

ウ 個を把握する評価活動

(7) 中学部の評価の5観点 (表2)

観 点	身に付けたい力	具 体 的 な 観 点 (目指す姿)
関心・意欲・態度	発見する	対象に関心をもち、取り組む意義を見いだす
	主体的に取り組む	課題設定や探究活動に主体的及び積極的に取り組む
	探求心を広げる	取組や探究から、新たに興味の幅を広げる
コミュニケーション	手段を選択する	適切なコミュニケーション手段を選択する
	積極的にかかわる	思いを伝えるために、人・もの・事柄に積極的にかかわっていく
	友達と協力する	自他の特徴を的確に把握し、配分し、協力しあう
	話し合う	他人と議論する中で、自分の考えをきちんと述べる
	認め合う	異なる意見に対し、弾力的に受け止め、素直に受け入れる
課題設定及び解決の能力	課題を設定する	学習対象に対して、的確で意義のある課題を設定する
	計画を立てる	結果を予測しながら、課題解決のための方法を考える
	情報を収集する	見通しをもって、様々な方法で必要な情報を収集する
	判断及び活用する	最適な情報を取捨選択しながら、的確に活用する
	実行及び体験する	解決に向けて、責任をもって、粘り強く取り組む
	解決する	情報や意見を総合して、課題を解決する
表 現 力	まとめる	適切なまとめ方を吟味及び選択し、効率よくまとめる
	伝える	きちんと相手に伝わるように、効果的な方法で発表する
応 用 力	成就感を味わう	活動をやり遂げたという達成感を享受する
	反省及び評価する	学習を振り返り、自己を客観的に見つめ直し、反省する
	生かす	学習活動を通して得た思いを人生観や将来観に反映させる
	役立てる	学習して身に付けた力などを他の活動に生かす

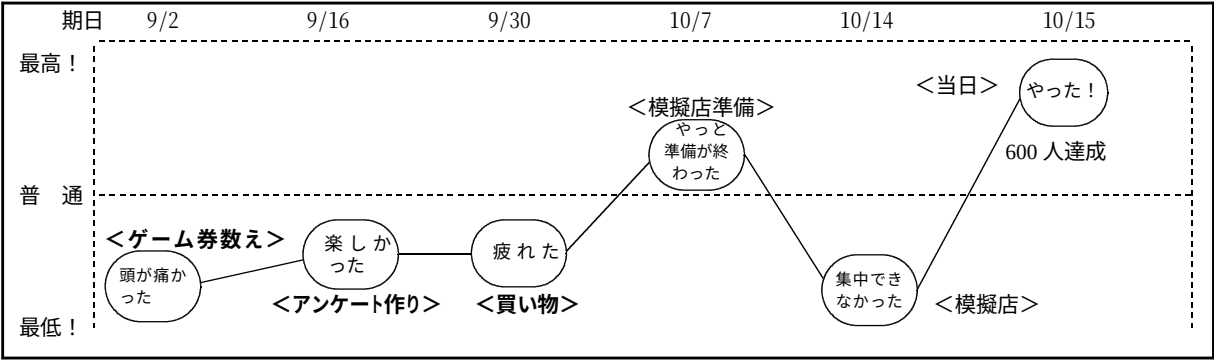
(1) 抽出生徒Kの評価

生徒Kは、学力もあり興味のあることには熱心に取り組める。しかし、総合的な学習の時間においては、決められたことはやるが積極的な姿勢はあまり見られなかった。サブリーダーとして成長を期待する生徒Kには、この単元において下記のように目標を設定した。

生徒Kは、「来客数、600人突破」という具体的な目標をみんなで立ててから、ゲームの準備や地域への広報活動などに積極的に取り組み始めた。豊橋祭り当日も、ダーツゲームの運営を黙々とやっていた。目標の600人まであとわずかとなったとき、接客は1年生に任せ、自らプラカードを持って呼び込みに出掛けた。そして、いよいよ600人を突破したとき、みんなでハイタッチをして達成感を味わっていた。生徒Kの成長は、教師による評価や様々な記録物からもうかがえる。(資料3, 資料4)

観 点	興味・関心・態度	コミュニケーション	課題設定及び解決の能力	表 現 力	応 用 力
目 標	・主体的に取り組む。	・友達と、相談、協力する。 ・工夫して、お客とコミュニケーションをとる。	・自ら、企画、提案し実行する。	・聞き手を意識して、分かりやすく表現する。	・目標達成と他からの評価から達成感を味わう。 ・文化祭など今後の活動に生かす。
評 価	・回を追うごとに、主体的に活動している姿が見られた。 ・リーダーの打合せ会をしたと申し出て、自覚をもって取り組めるようになった。	・リーダー会で積極的に意見を出すことができた。 ・グループ活動では1年生にアドバイスしていた。 ・地域にポスターの掲示を依頼したりそのお礼が礼儀正しくできた。 ・豊橋祭りでは、身振りや説明図を使って、お客に説明をしていた。	・リーダー会の開催、入場者600人への記念品、くす玉作りなど新しいアイデアを出した。 ・接客方法は、昨年度の写真を参考にして確認シートを作成した。 ・アンケート回収箱やアンケート用紙板を1年生に指示を出しながら、工夫して作成した。 ・前の時間は～だったから～したいという発言がみられた。	・接客方法について全体会で説明できた。 ・作業を進めるときは、友達とのコミュニケーションモードに合わせて手段を選んでいた。(手話、キュー・サイン、身振り、実物提示など)	・来客数が700人突破となり、達成感を味わっていた。 ・友達や教師と喜びを分かち合った。 ・「来年リーダーをやる」と発言していた。 ・他の授業や行事にも、これまでにない積極性がみられた。

(資料3) 生徒Kの学習履歴図



(資料4) 生徒Kの活動の記録

平成17年度 中学部 総合「空」活動の記録 月 日()

2年1組 氏名 _____

1 活動内容

豊橋祭りの運営

2 活動の目標 (この時間にがんばってやろうと思うこと)

600人達成

3 取り組みについて

(1) 自分の取り組みについて

① 頑張ったこと一理由も書こう

・ロケハンと、サードス → 客がくるから。

② 反省すること(もっとがんばればよかったところ)一理由も書こう

・キャッチセールスやりたかった。 → 楽しかった。(サウラ)

③ 目標をもち、やるべきことがわかった (課題設定の能力) A B C

④ 自分なりに、十分に活動ができた (問題解決の能力) A B C

⑤ 自分の意見を言ったり、発表することができた (表現力) A B C

⑥ 先輩や友達の見方や考えを聞くことができた (コミュニケーション力) A B C

⑦ 熱心に、まじめにがんばることができた (意欲) A B C

A…がんばってきた B…まあまあできた C…もう少しがんばりたい

(2) 先輩や友だちの活動を見て思ったこと(良かったところなど)

・(サウラ) が(店)の運営 をがんばっていたと思う。

4 次の回に自分ががんばりたいこと

1000人達成する。

先生から 準備やボディーのケアいねい がんばるしかな おかげで 700人 集ったので 感謝です。 来年は さらに 多くを 集め 喜ばせたいです。

友だちから 一生懸命 仕事 をがんばって 呼ばって がんばって がんばる がんばって がんばる がんばる

エ 参加者からの評価

来客者や、その保護者にゲームコーナーの企画について、アンケートの協力を得た。アンケートは150枚用意した。ゲームコーナーは好評で、「昨年よりよかったよ」「がんばっているね」「感動しました」という温かく励みになる言葉をいただいた。一方、「豊橋学校の生徒たちと交流したい」「手作りの景品にしてみたらどうか」など、今後の活動に参考になる貴重な意見もいただいた。

豊橋祭り後の反省会では、生徒たちはアンケート結果を今年度の成果と次年度の課題として、しっかりと意識することができた。

(3) 生徒の興味・関心に基づく高等部の課題別活動の取組

ア 高等部のMSTの取組概要

MST (Mind Spread Time)では、①自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、問題を解決する力などの「生きる力」を育てること、また、②情報の集め方、調べ方、まとめ方、報告や発表・討論の仕方などの学び方やものの考え方を身に付け、問題解決に向けての主体的、創造的な態度を育成すること、③自己を見つめ、現在及び将来について真剣に考え、卒業後の進路を主体的に選択し、生きがいのある生活を実現していくという自己の在り方生き方について考えることができるようにすることをねらいとしている。

進路探究，自然体験，国際理解の三つの活動グループを設定し，１年生から３年生までが自分の興味・関心に基づいてグループ選択している。各グループの活動は次のようである。

	ねらい	活動内容	生徒の様子
進路探究	・自己の適性を把握する ・１年次から進路について関心をもち，具体的に考えを深めていく ・自ら主体的に進路について考えられる力を身に付ける	・進路について考える会（卒業生による講話） ・社会見学（産業技術記念館，〇〇大学，〇△音楽大学） ・テーブルマナー ・〇×調理師専門学校見学 ・豊橋公共職業安定所見学	・「専門学校と大学の違いが分かった」 ・「大学に入るには勉強の積み重ねが大切」 ・「進路について具体的に考えることができた」 ・「これから社会に入る身になって，今までの行動が恥ずかしいし，もっとがんばれたらと思った」 ・「専門学校の授業は明るく楽しそうでした。進路の一つとして考えたい」 ・「ハローワークで仕事の探し方や申し込み方を学ぶことができた」
自然体験	・自然や地域とのかかわりの中で，生徒の主体性を育てる ・家庭生活や社会生活に役立つ知識や技能を身に付ける	・勤労体験奉仕活動（畑の世話） ・ハゼ釣り大会 ・テーブルマナー ・収穫祭 ・文化祭の模擬店での販売	・自分たちで育てたカボチャやホウレン草を材料にしてクッキーを作り，文化祭のバザーで販売した。購入費，レシピ，包装，調理など多くの要素が加わり，興味・関心が高まり，活動の幅が広がった。 ・菜園の管理に当たって，用務員さんに肥料や苗，鍬の使い方やカラス防除法などを教わった。人とのつながりも学ぶことができた。
国際理解	・諸外国の留学生と交流することにより，他国の文化，習慣，歴史を知り，改めて日本の文化，習慣を再確認する ・国際理解を深め，国際化に対応できる生徒の育成を図る ・交流を通して人とのかかわりがいかに大切かを知り，自分らしさを表現できるようにする	・国際理解交流会（東三河地区の高校に通う留学生との交流会） ・カナダ，マニトバ聾学校にて授業体験及び交流会 ・カナダ，マニトバ聾学校生徒の授業体験及び交流会 ・テーブルマナー	・アメリカ，スウェーデン，タイの留学生との交流会を行った。パソコンを使用して視覚的に自己や学校を紹介したり，クイズ形式で自己や学校をアピールした。 ・平成14, 15, 16年度，それぞれ２名訪加。大自然の美しさを満喫したり，開放的で楽しい授業に参加できた。また，聴覚障害者に対する福祉の発達について実感した。 ・平成16, 17年度，それぞれ２名来校。歓迎会や交流会を企画運営した。日本料理や菓子作りをしたり，ソフトボールなどのスポーツを楽しむ中で，食生活や礼儀作法などの違いを理解し合った。

さらに，全体の場で各グループの活動成果の報告をしたり，学年ごとに職業適性検査（２年）や就職指導懇談会（３年）なども実施した。

イ 高等部の評価の５観点

（表３）

観 点	評 価 規 準
関心・意欲・態度	ア 主体的に学びに臨んでいる。 イ 様々な視点から課題を見付けようとしている。 ウ 自分の考えや意見をもって課題づくりに取り組んでいる。 エ 理由や見通しをもって課題を設定している。 オ 学習活動を振り返り，新たな課題を探している。
コミュニケーション	ア 共感しながら楽しく学習している。 イ 相手の思いや考えを理解し尊重することができる。 ウ 他者との関係や社会とのかかわりを意識して学習することができる。

課題設定及び解決の能力	ア 主体的に問題解決に臨んでいる イ 適切な方法で調べることができる。 ウ 既習の知識や技能を生かして問題解決に当たっている。 エ 情報を活用して問題解決に当たっている。 オ 課題意識をもって学習活動に取り組んでいる。 カ 分かりやすくまとめることができる。 キ 学習活動に既習の知識や技能を生かしている。
表 現 力	ア 自分の思いや考えを表現し伝えることができる。 イ 発表・発信の方法を工夫している。
応 用 力	ア 自己を取り巻く環境を客観的にとらえている。 イ 自己評価の視点をもって学習に臨んでいる。 ウ 自己の役割や責任を意識している。 エ よりよい自己の在り方生き方を目指そうとしている。

(資料5) MST活動報告評価表

MST活動報告評価表		評価者 ()		
【評価の記入について】 ☆ 紙上発表を見て、それぞれの評価項目ごとに文章で評価を記入する。 ☆ 発表会までにすべての記入を終えておく。 ☆ 自分のグループについては、自己評価（反省や感想）を記入する。 ☆ 発表会の発表を聞いて、評価や感想を付け加える。				
評価項目	グループ	国際理解	自然体験	進路探求
関心・意欲・態度 他グループの紙上発表や活動報告会を見聞きし、興味をもったり、疑問に感じたりしたことを質問できたか。				
コミュニケーション 活動報告会では、様々なコミュニケーションを使い、場に応じた適切なコミュニケーションをとることができていたか。				
表現 紙上発表や活動報告会において主体的に発表できていたか。				
課題設定及び解決の能力 課題解決において自分の言葉で書かれた紙上発表となっているか。また資料等の添付は適切であるか。				
応用力・活用力 活動報告会で調べたことやまとめたことを、グループで協力して発表することができたか。				

活動ごとに「MST活動計画」を立て、個々に活動の目的や内容を表記した。活動後は「MST活動参加報告」にまとめ、5観点(表3)に基づいたABC自己評価をした。

報告会においては、より具体的な評価規準を示し、生徒が文章表記で相互評価できるようにした(資料5)。友達からの評価は、自分で考え行動していく手だてとなり、また、グループとしての活動の在り方や学習の的確性などについても考える機会となった。

ウ 高等部の総合的な学習の時間の方向性

生徒たちの「生きる力」を育成するためには、体験を広げ、人との交流を深め、人間関係を豊かにすることが重要であると考え。これまでの実践から、これらの活動は各教科のみでは直接体験することは困難であり、「総合的な学習の時間」と関連をもたせていくと効果的であることが分かった。生徒の興味・関心に基づいた体験や様々な活動によって、生徒たちは周りとかかわりながら自分を高め、生き生きと活動し、自分で課題を見付け自分の将来に向けて主体的に取り組むことができるようになってきた。

今後も、社会の変化に主体的に対応できる資質や能力の育成を図るために、各教科・科目等の指導の在り方の改善を図るとともに、意図的・計画的に知識や技能を一体化させる機会を設けることが必要であると考え。

5 研究のまとめ

(1) 研究の成果

ア 自己の思いをもち、主体的、意欲的に学び続ける児童生徒の姿が見られるようになった

本校の特色を生かして学習内容を体系化、系列化したことにより、小中高と育っていく児童生徒の継続した学びを設定することができた。児童生徒はそれぞれに思いをもち続け、より主体的、意欲的に周りとかかわりながら、生き生きと取り組めるようになってきた。

イ 自己を見つめ、学び方や生き方を考え、追究活動を深めることができた

評価活動では、児童生徒は学習の達成感を味わったり、うまくいかなかった原因を考え、さらに、新たな目標を定め次の活動へのステップにすることができた。活動を記録したり学習履歴図などへの記入を通して、自己を見つめ、他者を認め、よりよく学習に取り組もうとする力を高めてきた。

ウ 5観点を踏まえて生徒の成長を明確にとらえることができた

教師にとっては、単元の構成や目標設定を5観点でとらえることにより、児童生徒への支援や指導のポイントを共通理解しやすく、ティーム・ティーチングがよりスムーズに運営された。また、5観点による評価活動は、その観点で支援してきた結果を把握することになり、児童生徒の成長を明確にとらえることができた。これらの結果、PDCAサイクルの確立にもつながった。

(2) 今後の課題

ア 評価活動を生かして、児童生徒の自己評価力や自己教育力を高めたい

児童生徒が、評価活動を生かして、更に自主的にPDCAサイクルに沿って活動できるようにしていきたい。自らのマネジメントが、児童生徒の自己評価力と自己教育力をさらに高めることができると考える。

イ 単元の改善から総合的な学習の時間の充実を目指したい

各部やグループの特色を生かして、実践の課題や問題を整理し、改善を図りたい。そして、よりよい授業や更なる生徒の成長を願い、総合的な学習の時間の充実を目指したい。

ウ 本校の特色を更に生かし、一人一人が輝く活動をしていきたい

児童生徒を取り巻く様々な環境やもの、こと、人などとかかわりを生かし、聴覚障害のある児童生徒一人一人が生き生きと主体的に活動できるように支援していきたい。